



門  
巻 9/3  
1

へ5  
913  
1-2

吾言抄卷上



こころひんさるありまじ  
あはれやあはれ乃海に濱  
乃真砂とぬき抄めし  
是よりたよりありみ  
ちを釣ししひらうらみ  
山松の葉とて死わつひら  
すし古人言行の羨思思  
へはう死世の若れ抄りあり  
あまのんさすうゆらけらあ  
はもあめれとやさきを

あゝと智火心水く数  
あゝと花のこゝろわく  
折ゆえなれまのこのま  
情といはれたいとく  
いさめりてこのらあ  
あゝれとま言折とやせ  
むきく六粒乃あゝ路  
さゝあり替れまゝ  
えあのんくゝの志  
の寂寥やぬ付れ事

一 式目盃觴

二 以長波網

- 三 四季詞
- 四 水季詞
- 五 神祇
- 六 釋教
- 七 述懐
- 八 哀傷
- 九 山歌
- 十 水邊
- 十一 体用之物
- 十二 一隔三句物
- 十三 一隔五句物
- 十四 一隔七句物

- 十五 一之面より嫌也
- 十六 瀧廻れ
- 十七 姫河の事
- 十八 思惟の事
- 十九 教の切をたす
- 二十 白敷の事
- 廿一 中寄取様
- 廿二 批巻の事
- 廿三 一燈法度の事
- 廿四 會席他法の事
- 廿五 和漢篇

一 式目監觴

史連歌根源ハ仁王十二代  
 景行天皇四十年日本武  
 尊東夷征伐於時甲斐  
 國酒折の宮ありて新治  
 筑波の細よりお入れり  
 柞木式目元身ハ建治二  
 年より鎌倉幕府に於て  
 了為相親の述也之  
 其後新式自らハ文細言為  
 藤錦の也也然して後普  
 固攝政云應安五年

改め被書加ふと新式自述  
かとは号は又新式今案に  
後常世の園白殿下法の  
好士の規矩と集る宗<sup>せ</sup>切  
法師と相談ありけ時老  
宗述るるるるるるる  
より享徳元年小書院女  
心教宗祇亦逝去乃後每  
座力及弾論更亦來依之  
亀二年又肖拍老人 勅を  
うけ奉り殘建御といひ  
る書改む今わすれ用

海新式の一冊也

景行天皇 四十年より天正  
九年まで千五百  
十年

後宇多院御宇 建治二年  
より應安  
五年まで九十七年

後圓融院御宇 應安六年  
より享  
徳元年まで八十二年

後花園院御宇 享徳元  
年より  
文永二年まで二十一年

後柏倉院御宇 文永二年  
より天正  
九年まで八十年









色とりどり  
又紅葉  
きく

家風  
み風あり

いれ  
向やま  
美あり

洗  
二  
二

二  
二  
二

二  
二  
二

二  
二  
二

二  
二  
二

二  
二  
二

二  
二  
二

二  
二  
二

二  
二  
二

二  
二  
二

二  
二  
二

色とりどり  
又紅葉  
きく

家風  
み風あり

いれ  
向やま  
美あり

洗  
二  
二

二  
二  
二

二  
二  
二

二  
二  
二

二  
二  
二

二  
二  
二

二  
二  
二

二  
二  
二

二  
二  
二

二  
二  
二

二  
二  
二



片... 不嫌く... 為... 起... 神... 神...

ろ

ろ 飛... 神あり

は

葉... 雑あり

花... 雑あり

花... 雑あり

勿... 雑あり... 花... 雑あり... 花... 雑あり... 花... 雑あり...

花... 雑あり

花... 雑あり... 花... 雑あり... 花... 雑あり...

又あつて懸りてと云 花の首  
半あり地准し 花の首  
月乃常何も花不也花とやと  
なとけは居あつてあつてはとけ  
白種へし 花の散る梅  
乃らりつらおと嫌落ちりあつ  
まきうらあなはとけを去也  
これのあふ おぼあのおつる  
おし おし 月うけの  
他准し

けふれらけうけハ新なり  
やうの流あし花うけもあつ  
あもみお陰のまあり度う  
ハ花うけうと 花乃香  
ととらり 補のまがしとゆり  
ぬいけととらり 袖乃香

花れあし  
嫌へし

人備也地可係るゆりちゆり  
せうい合まて人備るう

花とあふし 月と反甲  
く地人備

花れ物 手ゆりより地物也  
地物也あま

人のあまゆりあふと花は  
なまあれハ物

花乃香 地物ゆり人物也  
まは日界の理り

あねし又まけあつてん  
うたああり

けふれ雲花乃波とれ

の勝 おし 花の散あつて嫌と  
ハ地物地水邊

何もあつて嫌とあつてあり  
それの後白糸とらんと

たぬのちろ種といへば花は  
色のついでさうり也た  
く受伸短 花とす  
そのあり

すぬの 小野山とあるらひ  
ても様とあつたは

とい様といふまへさうに  
但さういふく花をさうては  
らえさうい 花とす  
あり

おとさう二白様といふは  
おとと様といふは花とす  
うとさういふは花とす  
可依白といふは

花 小より野付る事様也  
花とすは花とすもみら  
誇田同 けふの都 花  
前あり

也(花)花とすは花とす  
と代人志つたは花とす

用し 花乃すいふは

乃袖未 花也 正花也但白  
新といふは花とす

より 花衣 正花也花也  
二白様といふは

衣敷のくは花也花とす  
のきても月家とす

花衣 正花也その故は様  
常の半也式也

其時花くは花とす  
るは花也

さふ 花白脇三乃外面  
世はかりては花とす

くは花とすは花とす  
花とすは花とす

花とすは花とす  
花とすは花とす

乃心袖とすは花とす  
花とすは花とす



いほきりのりしと 橋 出 一  
入て二のま

一乃取う一後橋一長乃う記  
とくまきいひてと式自う

ましくたてしとてうう  
見たり一可有之長乃のう記

と又た後橋も橋のまきれ  
た折と煉曲

橋 非 勿 論 人 備 あり 記

と山 山 あり 折 と 煙 へ 記  
と山 山 あり 折 と 煙 へ 記

あり 野 二 白 煙 記  
あり 野 二 白 煙 記

野 米 煙 あり 折 の 原 林 麓 記  
あり 野 米 煙 あり 折 の 原 林 麓 記

原 有 下 し 但 新 記  
原 有 下 し 但 新 記

と あり 折 あり 折 あり 折 あり  
と あり 折 あり 折 あり 折 あり

い 心 あり あり あり あり あり  
い 心 あり あり あり あり あり

の あり あり あり あり あり  
の あり あり あり あり あり

演 び あり あり あり あり あり  
演 び あり あり あり あり あり

小 家 あり あり あり あり あり  
小 家 あり あり あり あり あり

但 あり あり あり あり あり  
但 あり あり あり あり あり

可 嫌 あり あり あり あり あり  
可 嫌 あり あり あり あり あり

乃 奇 あり あり あり あり あり  
乃 奇 あり あり あり あり あり

と あり あり あり あり あり  
と あり あり あり あり あり

拒 拒 拒 拒 拒  
拒 拒 拒 拒 拒

也 也 也 也 也  
也 也 也 也 也

と あり あり あり あり あり  
と あり あり あり あり あり

字多れを分る けりり  
とらりしむす  
妙にうきもに百類う二りり  
多りうきりの酒りれもきお  
准すは へりり  
おとん行きも一庵 へりり  
に二所あらし  
水りり初る常うににてあ  
又列のまねきさうきりは  
る去 へりり 共一氣に  
也  
とといふあつて二あり  
初りり 近代の歌ゆり  
謀りり へりり 二あり  
らりり へりり  
ありり へりり 一白不怒

へりり へりり へりり  
ハあねらりりりりりり  
寸但地と書故あり へりり  
二白極ありりりりりりりり  
てみりりりりりりりりりり  
らりり へりり

に

執負 へりり 二ありりりりりりり  
非祇 へりり へりりりりりりりり  
のりり へりり へりりりりりりりり  
のりり へりり  
非祇 へりり へりりりりりりりり  
とと へりり へりりりりりりりり  
とと へりり へりりりりりりりり  
りりり へりり へりりりりりりりり  
りりり へりり へりりりりりりりり

上



遊 兵一寺 息居 未の ありし 遊  
他 ありし 刑と ありし ありし  
故 ありし ありし ありし ありし

遊 此 所 山 山 歌 ありし 二 白 三

小 平 山 山 居 ありし 二 白 三

鳥 ありし 二 鷄 ありし ありし ありし

也 異 名 ありし ありし ありし ありし

ありし ありし ありし ありし ありし

小 河 海 水 ありし ありし ありし

ありし ありし ありし ありし ありし

白 小 青 面 ありし ありし ありし

小 河 海 水 ありし ありし ありし

ありし ありし ありし ありし ありし

ありし ありし ありし ありし ありし

ありし ありし ありし ありし ありし

ありし ありし ありし ありし ありし

ありし ありし ありし ありし ありし

ありし ありし ありし ありし ありし

ありし ありし ありし ありし ありし

ありし ありし ありし ありし ありし

ありし ありし ありし ありし ありし

ありし ありし ありし ありし ありし

折あひけりといへりし

あてやまうり 二の去也あて

らねば敷あり

か

何れはけし 辨あり七月廿日

早とせしれ

少の 帝との元正の流高年

也 目次の日月次の内より

早月次 類也内の時より

二あり

年言て 日毎毎度は敷

下巻よりくりくりはす

遠里小野 ありは病不

わ 病不

戸 戸也とかそ実の戸若戸

也 あり言の戸あり 戸の内

西の卯より 戸の戸あり 戸の内

戸 小窓の戸あり 戸の内

戸 戸あり 戸の内

戸とあり 戸の内

のあり此 戸とさく

力 打ちく 戸とさく

水邊 戸とさく

水邊 戸とさく

舟 物わし

舟 物わし

友 一鳥歎

友 一鳥歎

水と 總之と

水と 總之と

虎 一あり

虎 一あり

鳥 一あり

鳥 一あり

鳥 一あり

鳥 一あり

鳥 一あり

鳥 一あり

鳥 一あり

鳥 一あり

鳥 一あり

鳥 一あり

やりの羽る波 或る風

鳥 さうらうさうらう

鳥 さうらうさうらう

鳥 さうらうさうらう

鳥 さうらうさうらう

鳥 さうらうさうらう

鳥 さうらうさうらう

鳥 さうらうさうらう

鳥 さうらうさうらう

鳥 さうらうさうらう

鳥 さうらうさうらう

鳥 さうらうさうらう

鳥 さうらうさうらう

鳥 さうらうさうらう

鳥 さうらうさうらう

鳥 さうらうさうらう

鳥 さうらうさうらう

鳥 さうらうさうらう

鳥 さうらうさうらう

或る風

さうらうさうらう

さうらうさうらう

さうらうさうらう

さうらうさうらう

さうらうさうらう

さうらうさうらう

さうらうさうらう

さうらうさうらう

さうらうさうらう

さうらうさうらう

さうらうさうらう

さうらうさうらう

さうらうさうらう

さうらうさうらう

さうらうさうらう

さうらうさうらう

さうらうさうらう

さうらうさうらう

ち

子早振 子のまうみ

振のまきこころ二白うら嫌へきうらうら

千のま おま一は也依有

異流能う受仰 明仰指南者也

ちとら うらまのまおを記

ふれ うらまのまおを記

子里 とらうらまのまおを記

路と道 とらうらまのまおを記

とらうらまのまおを記

とらうらまのまおを記

とらうらまのまおを記

とらうらまのまおを記

とらうらまのまおを記

とらうらまのまおを記

とらうらまのまおを記

とらうらまのまおを記

とらうらまのまおを記

契 といふるうたのむらけと  
依の神付らやそとく人から  
り今うたのあつたのあまは  
とよるあつたのあまは  
く物にたまりあまといふ  
のうらやあれは月よのたま  
せうあつたあまはけきと  
なまはつたあまはつたあま  
川うらやあつたあまはつたあま  
あは同意のあまはつたあま

り

ア ちれあつたあまはつたあま

ア ちれあつたあまはつたあま  
ア ちれあつたあまはつたあま  
ア ちれあつたあまはつたあま

新 膳 かしらあつたあまはつたあま

ね

ね 人備うあつたあまはつたあま

ね 人備うあつたあまはつたあま

ね 人備うあつたあまはつたあま

ね 人備うあつたあまはつたあま

ね 人備うあつたあまはつたあま

ね 人備うあつたあまはつたあま

ね 人備うあつたあまはつたあま

ね 人備うあつたあまはつたあま

ね 人備うあつたあまはつたあま

あまのいのみるおねの  
せは

億ねる かこえわごとく云河ねる

なるねる 此乃二白嬌ねる

二白りり嬌やうのそくの  
河行をいあ

物のおととらんねる

付るはも不嬌又極のねる

とれにささねや可るらん

物のおととらんねる

りり嬌やう とらんね

物のおととらんね のあひさ

りり嬌やう きお付

物のおととらんね

りり嬌やう

物のおととらんね

りり嬌やう

物のおととらんね

りり嬌やう

物のおととらんね

りり嬌やう

物のおととらんね

三月三日のんころりん  
 けしとあしんころりん  
 けしとあしんころりん  
 わり一面不滑さのりころりん  
 きのりころりんころりん  
 あり他  
 准し

を

恩のんころりん  
 恩のんころりん

百發く二ひん  
 百發く二ひん

尾上 藤原 高政 公の 新  
 心一ころりん  
 運 月 色 色  
 ありころりんころりん

小野 二ころりん  
 小野 二ころりん

小舟 すきそあしころりん  
 有すころりん

小と小 小と小  
 小と小 小と小

小と小 小と小  
 小と小 小と小

小と小 小と小  
 小と小 小と小

小と小 小と小  
 小と小 小と小

小と小 小と小  
 小と小 小と小

小と小 小と小  
 小と小 小と小

小と小 小と小  
 小と小 小と小

小と小 小と小  
 小と小 小と小



女 ぶるるもた一あり通年  
世す用控の相とらうり従ふ  
るくにも知くもくうりうる海  
しきさ

親 しま二白きうのへし

音 小聲、歸きぬ二白きうのへし  
く多ひく式にまの山まき  
川 赤き凍し他う粉のきん  
山 彼のさきま川にけしは  
あつと二白きうのへし  
池 准し

とやし 也佐のまきとられと  
らむゆへ とたゆり死 脈の  
とまきとらうりなむとらうり  
とらうり死 ともありた  
右 末のるり也死のまきとらうり  
りしとらうり 池 准し

遠近 ともて有起しとらうり  
二まきあか起しとらうり池に  
まきのまき通のまきとらうり二白  
とらうり 迷懐りあつに

わ  
我若 ともひても人傷に地さ  
半人のりく式約に地は  
わけの用控を愛也他うり  
和 田乃原 海うりと地あり  
田のまきいなる地  
船 様ありり門毎た  
はの所毎たひ也門まきの後  
し毎たしと様也

二五

若葉

たす事くしうと極地の

若くし若くしとすすし細れ  
せし若くしいとすたうさう(也)  
青葉といふ若くし(い)うと  
りう

若葉

たす二このおる葉

られ行つてついても葉とく  
一ありまき也

とさし回

う人物二句嫌

いり式( )  
へまう

とほ草

まに二句嫌也

普通うハ葉草とワリすと  
ト( )にうりり毛也又清捕抄  
小ハ葉草にわ( )也伊勢  
大和地( )りふと相違す

えうり法定ハ置方あり毛詩  
り葉( )と( )り

とすれ( )

と( )

二句嫌あり

おふ( )

たひ( )  
ハ( )  
島( )  
豆( )  
あ( )  
う( )

人の( )

あ( )  
ま( )

や( )  
さ( )  
う( )

こころれり 戯一白きりあり  
ふりて 各の字白前従ふに  
ふりて

か

非 此一非代一各非一と  
非 此一非代一各非一と

合て二 非 此一非代一各非一と

りり 新式

非 樂 此也此非あり非

非 此也此非あり非

非 此也此非あり非

非 此也此非あり非

上 此也此非あり非

春 日 此也此非あり非

子 此也此非あり非

名 所 此也此非あり非

河 舟 此也此非あり非

き 舟 此也此非あり非

川 舟 此也此非あり非

り 舟 此也此非あり非

河 音 乃 雨 此也此非あり非

水 邊 此 也 此 非 あり 非

陰 物 此 也 此 非 あり 非

鑪 戸の字付くもろかし

貝 雜あり虫敷やうありはし敷

准 しの也他 **のう** 戸良

の字よりきくらあり

戸 戸良と所より風

とのり行まて面と地あり

の字より風

の字より風

首 達 戸の面より風

頂 二ありうたは

二ありた

二あり

かま 地居より

二あり

二あり

二あり

二あり

二あり

二あり

二あり

二あり

二あり

二あり

二あり

二あり





七  
然も各別者不な分はるひま  
新式之和史各別たはるひま  
とよしこころうしと鳥籠と  
このよひとすう新わう初  
而はこり入を造の外はつれ  
すれぬのうすしと映鏡あり  
申古に用されしといふ又入  
逢う用れ也  
うけろふ 地中敷地を神  
りり 冠 衣敷うわは  
髪 とひけと眉の霜  
乃敷人傳  
歌の雪 冬うわう寸路也に  
雪 つかはる嫌あり申古  
りり

りり  
かすの音 ぬるに地す  
歌と陰 けう二あり目うけ  
ホハ陰也とくくうけハ新也  
うこうううけハ陰也水うけハ  
新也さうけゆうけハ景也  
け儀これもふれ為事あり  
ひり  
もりあり  
陰歌系 いはま一けわひ  
二白さうらふ  
陰 うらうらうれい  
二白地やう山本あり  
たの類也天う下又さうこうれ  
てうの歌又信水あり  
持のりぬの歌不地  
まははさうりい  
止 三十一





かきこころ見のやま二白地

管 けいこうこころみけいけい

若別れ申也竹子てらこ

竹立 けいけい物にけいけい

たうきまら けいけい物にけいけい

きくらあみり 二白

返ぬ 二白地准し

人海さ 二白地准し

鳥やまのけいけい

おまじくのけいけい

おまじくのけいけい

おまじくのけいけい

おまじくのけいけい

おまじくのけいけい

おまじくのけいけい

おまじくのけいけい

おまじくのけいけい

おまじくのけいけい

おまじくのけいけい

おまじくのけいけい

おまじくのけいけい

おまじくのけいけい

かきこころ見のやま二白地

管 けいこうこころみけいけい

若別れ申也竹子てらこ

竹立 けいけい物にけいけい

たうきまら けいけい物にけいけい

きくらあみり 二白

返ぬ 二白地准し

人海さ 二白地准し

鳥やまのけいけい

おまじくのけいけい

おまじくのけいけい

おまじくのけいけい

おまじくのけいけい

おまじくのけいけい

おまじくのけいけい

おまじくのけいけい

おまじくのけいけい

おまじくのけいけい

おまじくのけいけい

おまじくのけいけい

おまじくのけいけい

おまじくのけいけい

一切不可有混乱して不  
事ありれども悪流とやう  
へ成る事あり  
あり  
いありへうも縁ういふまうを  
雑とていふまうもさうしていね  
うていふまうも河但二白可  
嫌ありてと嫌へうに治定  
せり

かゆき 一應う二あり

同くく乃くくはあ  
可准し

ふあぬ 先うあめう

ありいあぬ船の座あてり  
なありも船といふ同前也  
とありぬも同前也

このういりてさうひやう  
うらうぬ

いん ほうたひやうた  
初ううりてさうあしあ

まやうよ とうあめうた  
二白可准二うぬのてふと

と也  
初ううりてさうあしあ

地准し 二白可准也

ういりてさうあしあ

かゆき 一應う二あり

ありいあぬ船の座あてり  
なありも船といふ同前也  
とありぬも同前也

このういりてさうひやう  
うらうぬ

いん ほうたひやうた  
初ううりてさうあしあ

まやうよ とうあめうた  
二白可准二うぬのてふと

よ

代 二と云ふ六部代一君代一  
代 まじりし いれし 代  
大君代 御代也

代 よ 世 立 白 去 也 あ く と  
代 あり よ う あ わ う う う う  
ハ い 世 也

世 る よ 中 と り あ ま 二 白 姫

世 に 難 ふ 人 の あ や ま る も 也 不 治 平  
世 一 只 世 と も も 因 り て 連 極 世 一 代  
世 一 急 う 一 上 也 あ り あ て  
世 ハ 花 盛 る し く の 六 年 世  
あり 後 世 迄 世 ハ 連 懐 の 世 也  
前 の 世 後 の 世 也 し ハ 御 の 世  
あり 折 と 場 也 急 の 世 ハ  
あり 一 有 十

御 れ ハ 合 し と  
也 あり

葉 門 又 選 よ も あり よ す て  
も 秋 の ま の て ハ 世 と 折 合 と  
書 あり

遊 の や し 人 物 居 不 あ る

遊 中 居 取 う 二 白 姫 也 よ  
も ま と り ハ 居

あ り と れ と  
と り ハ

よ も ま さ う よ 後 芽 中 解 と  
と 姫 也 百 秋 う 二 り り 也

嘆 子 鳥 秘 流 も 子 も れ  
鳥 と り 心 え へ 身 半 あり  
そ う ま の よ あり 向 ま し に ハ

うらもれ也 係山うーよらんぬ  
ぬいせり

夜と約月 何ふにわらんぬ  
何ふにわらんぬ

夜乃わくは 又月おころ  
かきつれ

いふも也 姫とはあそれも  
三白めはけけらきりのあり

又心わくもあもろーううは  
又よ入目をとつらつたの事

あまの事 万緒うーも引  
あり人責事也

夜乃あくる とらあ事 時  
分よわんぬ

夜半 百換うー二わろ

霽 何ふにわらんぬ 夜の中  
さいらああり

よおし とらあ事 常  
夜の事也

夜乃わらんぬ 心うー

横雲 あおせらうい  
中よあらんぬ

のゆきあれとらうり心  
こと事也

よー うら花はくも也

あまあらんぬ 野  
あらんぬ

吉野 よ船あれとら  
うみすおれ

歌うすらんぬ いく  
り

吉野乃園栖 とらあ事  
人ああり

定の門毎 ハ橋あり  
外門毎

字ういりわらんぬ 心  
前うー

橋

よるひ 但る老二白可妬  
不妬くむのそゆはけ  
色不答

よそ 一悪う又一わる  
地漚し

好取目 たりみる二白妬あり  
ハえのまふ妬し

まよふまよふ 二白まよふ  
おろし

# 大

竹乃言 祇祇あり但る  
うんものう

竹 又草束打紙と可燥  
也に系とけ五白燥也

甲 けよすくけ之白  
燥也

亦 又け志のよふ白妬  
也ちりろ有うけと云  
并乃事也白五白  
燥あり

竹乃林 竹林枯舎のまに  
けのち甲也他とけ  
可る五白云

亦と竹 ちのろ白妬  
をれ里うとけ竹五  
白燥あり

玉 中より有れと云  
是ハ三つひさくた  
云事也家れ玉は花  
上 三十七



憲乃之由也すれく

とこまの命の命一の命あの命人の命しの命

玉の命二の命白の命姫の命あり

魂の命二の命白の命姫の命あり

玉の命の命の命二の命白の命姫の命あり

政の命乃の命政の命乃の命政の命乃の命

政の命乃の命政の命乃の命政の命乃の命

政の命乃の命政の命乃の命政の命乃の命

田の命乃の命田の命乃の命田の命乃の命

田の命乃の命田の命乃の命田の命乃の命

田の命乃の命田の命乃の命田の命乃の命

田の命乃の命田の命乃の命田の命乃の命

田の命乃の命田の命乃の命田の命乃の命

田の命乃の命田の命乃の命田の命乃の命

田の命乃の命田の命乃の命田の命乃の命

田の命乃の命田の命乃の命田の命乃の命

田の命乃の命田の命乃の命田の命乃の命

田の命乃の命田の命乃の命田の命乃の命

田の命乃の命田の命乃の命田の命乃の命

田の命乃の命田の命乃の命田の命乃の命







ワシ流いりて

藤乃志心もあつて八る此月

いハあつてりハ

播た一あやけきもあつて

花うりす付て

種由く ころふもくもく人地

薪 よま二の地也推まじ

まういりたつり

ワシハ急うあつて

たこの 小火二の地也

たく次れ事

ねくあつていり

の敷ハ地所合さる火の敷に

也 氏れうまう也

人論あり

校子ハ是とさうり

子そくれ 流とりのまう

も二の地朝何ふりハ

たうくれ 不地

まうあき

あり

何と云ふの意なきはあれ  
もまのてし出遊をいふ意  
堪ふ絶 けけつてくる事也  
立 ころころの二句絶  
たし心 小道を不遠し  
白りりてささるふ  
他准し  
勅 依る神宗たりたり  
たし心 二句也 小道にたり  
ハタミハミをわき也 ありい  
たし心 人らうすりか  
二句の心ハ物りに不極  
大り世の中ありあり  
不流むらうし 物りにた  
あゆむらうし 二句  
也

今 ころころの二句  
るのこころは此るの  
月前  
たし心 ありくあり  
る心 ありハハハ  
今 ころころの二句  
鳴るころころハハハ  
ふ也 ころころハハハ  
る心 ありハハハ  
たし心 二也 たり  
わいて 意ありハハハ  
に一つ 意ありハハハ

終

二

田十三

建いあしねと不測の事  
さうらふはるをさうらふ心着穿  
あはれ合さうらふのあり  
あしつられらるる  
下知のりみふ二白  
きららあり

其曉 氏下生乃半あり

穴 西折る一つ也い外  
ありさう一虚言さうめ  
なとさうさう一  
六あり

虚空中天 何れ三のり  
面とああり  
さうさうのありさう一虚言さう  
也

そ 天久くさうさう  
いさうさう二白あし

たのめ けさのさう  
さうさうの百款  
地准し

外面 只也面のさう  
あありさうさうさう  
白去也い教さう一  
用也

園 地あり  
園生と久ハ居不さう  
不習いさうさう  
さうさう

山 嶺あり人倫にあ  
さうさう

袖 あり  
さうさうのさう二白  
あり

多くは露霜くぬるは  
不燥也

さて此の油の露は

露あり大に濃の心あり  
他をく露おきては

らん白くも候くも燥  
志くも候くも燥

の心は候くも燥  
あり候くも燥

神の膏 この類は候也  
焼膏より候

地准し

そくわくおきり

候くも燥

う 一考あり候  
類二白さらり候

の候くも燥

そく 候くも燥

ゆ 候くも燥

一向に候

候年抽 松竹 葉の候

候くも燥

候くも燥

つ

候くも燥



階物とてしりてはらうし心あり  
友の約入る下地階地月の  
一ありき事しりてをりて  
中内ゆき霜不混念ゆあり  
又目前に月と雪より足  
ありしり新ありてをあり  
水くあり物うありへうに  
さる月霜をくしりて天  
蒙あり地あり是てあまた  
地とらあり

月をみる 其のよれ月

みそりて又月有月見れ  
まじりていさといきなり

事しり

月の秋花吐春 しては

分り他すやうあり宗祇  
の流しとてはいさといき

御ねの意分とらへ  
きり

今日月 入ては月

月日うしむ上月日月れ  
切つり月夜あみはあり

他き

月の宿 長而ありと書  
てあり様士

為あれいけあしはあり  
とらあり地敷白年とに月

の宿可候地意

月とあり 人端

月の友 人端ありありと  
せりてありありと

あつりてありありと  
後白新人端ありありと







之 申 多 ね ぐ ぐ 以 次 裁

倭 北 人 鏡 刀 太 多 之 の つ び

つ 連 ぐ あり 二 倍 ひ 一 二 而 を 疑

所 ね あり 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

御 内 用 付 此 等 別 あり

雜 面 約 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

二 あり 何 七 耳 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

心 心 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

つ ね も あり 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

流 不 釋 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

所 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

念 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

所 水 あり 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

と あり 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

所 あり 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

所 あり 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

所 あり 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

所 あり 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

所 あり 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

所 あり 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

所 あり 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

所 あり 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

寐 夢二白 夢ゆりハ  
寐ゆりハ 夢ゆりハ

腸分三 腸外面連続

世と寐ゆりハ 心

有と寐ゆりハ 心

依と寐ゆりハ 心

眠 二白 國

了 寝ゆりハ 心

岩根 目録

水の新ハ 心

岩 心

な

子 長 祿

説者 波 祿

波乃花 心

善乃 祿

如 祿

て 祿

波 祿

波乃雲 祿

地一様 祿

さ物ハ不物ハ 欲ニ是新成  
乃河也ハ心ハ未亦に混合  
すうとハ心ハ人の雲れあこり  
少り多りさうハ心ハ人より  
て未亦に混合  
すうとハ心ハ

波乃露 少り物也輝あり

波抗 舟をむきさうハ心ハ  
とらハ心ハ人ハ心ハ人ハ心ハ

藤丸 瓦苑ありさうハ心ハ  
何も波のまあり

水白嫌りさうハ心ハ人ハ心ハ  
わさハ心ハ人ハ心ハ人ハ心ハ

あくれ 只一ありさうハ心ハ  
水草ありさうハ心ハ人ハ心ハ

あしそ丸 山形ありさうハ心ハ  
子鳥はさうハ心ハ人ハ心ハ

あしそ丸 山形ありさうハ心ハ  
子鳥はさうハ心ハ人ハ心ハ

あしそ丸 山形ありさうハ心ハ  
子鳥はさうハ心ハ人ハ心ハ

あしそ丸 山形ありさうハ心ハ  
子鳥はさうハ心ハ人ハ心ハ

あしそ丸 山形ありさうハ心ハ  
子鳥はさうハ心ハ人ハ心ハ

あしそ丸 山形ありさうハ心ハ  
子鳥はさうハ心ハ人ハ心ハ

あしそ丸 山形ありさうハ心ハ  
子鳥はさうハ心ハ人ハ心ハ

あしそ丸 山形ありさうハ心ハ  
子鳥はさうハ心ハ人ハ心ハ

あしそ丸 山形ありさうハ心ハ  
子鳥はさうハ心ハ人ハ心ハ

あしそ丸 山形ありさうハ心ハ  
子鳥はさうハ心ハ人ハ心ハ

あしそ丸 山形ありさうハ心ハ  
子鳥はさうハ心ハ人ハ心ハ

あゝあめあよ あゝあめあよ

らん草乃 らん草乃

源のぬ 源のぬ

あみ あみ

あり あり

洞乃 洞乃

海 海

洞 洞

洞 洞

洞 洞

洞 洞

洞 洞

洞 洞

洞 洞

洞 洞

洞 洞

洞 洞

洞 洞

洞 洞

洞 洞

洞 洞

洞 洞

五十二

五十二

五十二

五十二

五十二

五十二

五十二

五十二

五十二

五十二

五十二

五十二

五十二

五十二

五十二

五十二

五十二

五十二

五十二

五十二

五十二

五十二

むらこ むらこの類百族

あふれ あふれの類百族

あふれ あふれの類百族

あふれ あふれの類百族

あふれ あふれの類百族

あふれ あふれの類百族

あふれ あふれの類百族

あふれ あふれの類百族

あふれ あふれの類百族

あふれ あふれの類百族

あふれ あふれの類百族

あふれ あふれの類百族

あふれ あふれの類百族

あふれ あふれの類百族

あふれ あふれの類百族

あふれ あふれの類百族

あふれ あふれの類百族

あふれ あふれの類百族

あふれ あふれの類百族

あひをよきれひくも

也 あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも

あひをよきれひくも









そくちをこおりのる也三乃  
外ありそ名のみし乃るに  
ありし見乃しし藻る  
すむ生るるむしるるは  
同前々はくすはすむしる  
はまらむしる乃唯るる  
そ名のみしし乃を姫し  
るしし解とハ又別と有し  
しし悲別疾系にあつて前給  
ししししして心上空志るる言  
也しりり

むねし 疾ふありるこ  
りあり

背 品一ありあしるるの鬚  
あり背にのりしし  
とさくらふ

胸乃霧 あり  
梅ありそしきりるるし打越  
とさくらふあり

しひ乃さう 同  
し打越と

白婿 白婿也  
白婿也

白婿也 白婿也

白婿也 白婿也

白婿也 白婿也

白婿也 白婿也

白婿也 白婿也

白婿也 白婿也

白婿也 白婿也

白婿也 白婿也

やういふ事とていふかため  
る類し而してこの類は

う

右 <sup>うま</sup> 祓祓とありはたす意  
用類しとて也但白所

類

哥 <sup>ま</sup> 此は不始但言系  
乃道二人のうけりて

始 <sup>ま</sup> あり

号 <sup>ま</sup> 乃道一人の道なり  
乃類しとてなり

鳥 <sup>うま</sup> 一とて又

中 <sup>ま</sup> 乃道一人の道なり  
乃類しとてなり

百子鳥 <sup>うま</sup> 乃道一人の道なり  
乃類しとてなり

娑也 鴉 <sup>ま</sup> 乃道一人の道なり  
乃類しとてなり

付 <sup>ま</sup> 乃道一人の道なり  
乃類しとてなり

う <sup>ま</sup> 乃道一人の道なり  
乃類しとてなり

乃 <sup>ま</sup> 乃道一人の道なり  
乃類しとてなり

乃 <sup>ま</sup> 乃道一人の道なり  
乃類しとてなり

乃 <sup>ま</sup> 乃道一人の道なり  
乃類しとてなり

乃 <sup>ま</sup> 乃道一人の道なり  
乃類しとてなり

乃 <sup>ま</sup> 乃道一人の道なり  
乃類しとてなり

乃 <sup>ま</sup> 乃道一人の道なり  
乃類しとてなり

乃 <sup>ま</sup> 乃道一人の道なり  
乃類しとてなり

乃 <sup>ま</sup> 乃道一人の道なり  
乃類しとてなり



うきま とりあまき 無の白に

勿論 うきま ありあり

あふ うきま ありあり

うきま うきま ありあり

うきま うきま ありあり

うきま うきま ありあり

うきま うきま ありあり

うきま うきま ありあり

うきま うきま ありあり

うきま うきま ありあり

うきま うきま ありあり

うきま うきま ありあり

うきま うきま ありあり

うきま うきま ありあり

うきま うきま ありあり

うきま うきま ありあり

うきま うきま ありあり

うきま うきま ありあり

うきま うきま ありあり

うきま うきま ありあり

うきま うきま ありあり

うきま うきま ありあり

うきま うきま ありあり

うきま うきま ありあり

うきま うきま ありあり

うきま うきま ありあり

うきま うきま ありあり

うきま うきま ありあり

うきま うきま ありあり

うきま うきま ありあり

人見あやまりもれあり

お

雲井 と初の本ありてい  
る立の端ありれぬ心あり

大井 小井ありあり

井せ記 の字也如世の記

せり乃の字も入あり

官守 井あり二の字あり

猪百 猪ありた一あり

何一産あり

歌の字は事

式目今用

てらむに新式ありわを  
めうして初条とてみ  
てわうて一ありあり

式目おおんの字

あ

あやまりありあられま  
やあさゆあさゆあさ  
月前ありあけありの  
すうしきありあり  
名の歌あり

歌の字

中りうらに沼のきりしこれ  
おれまとのまじりのり也  
一切り近代これと  
きりりす

顔の字

ありてとほほに  
うらうらとく  
山より中より  
日面より  
式より  
顔より  
うらと  
ありと  
二より  
空あり  
す人

の

野の宮

勿端非紙より

野

不原二白也  
不姫田面の原  
姫わ  
二白姫  
野  
百款  
る

野の野

面の字不姫  
心より  
まの心  
白折面  
こま  
野

入  
の  
入

行も折紙と姫也



野山の志々りてか角

極わううらあ

のそくやほくたつ洞

きく一ありあせつひほる

うら敷可准し

那う用を打り事不無合

あけの心りうこれ

野分 扶まり凡う又白野

二句端ありのうたは八折の

あけのうらひうくうらあ

あふんのもや

のやるとらよ野う地

は佛はの外うは合のほ

二ありやうあす也

はう船動ると船りうらひ

うら付わひらう又毎車

うらうらうらうらうら

うらうらうらうらうら

うらうらうらうらうら

うらうらうらうらうら

うらうらうらうらうら

うらうらうらうらうら

行乃玉水 りくしり地際  
お水邊に地を

行れあやめ うへもの水邊  
也

乃武 うひさし  
あまー地也

長閑 うまゆう二句地を  
あまーく二句

地 あまーり  
あまーり

ま二句地 うへ  
あまーり

三句地 うへ  
あまーり

物 あまーり  
あまーり

と あまーり  
あまーり

た

老 一鳥あまーり  
あまーり

老 うひさし  
あまーり

老 うひさし  
あまーり

老 うひさし  
あまーり

老 うひさし  
あまーり

老 うひさし  
あまーり

老 うひさし  
あまーり

老 うひさし  
あまーり

老 うひさし  
あまーり

老 うひさし  
あまーり

乃葛根とくや平一婦のくはや  
云流あり二白さくら之と  
あり

釣の箱

未述懐る  
親子

人倫  
男

也  
一又極男と云ひ  
て一たりれに

鬼  
千白うもた一也中敷  
鬼之虫此箇を旧流とく

但鬼神の俗不可則強ら不  
可ぬ其ゆは欲以上新式の  
行あり

大井門

也  
尾上  
一奉とらう也  
余亦は尾の

字上の字とてしる二白  
まらあり

おく山  
一庭又一山は乃敷  
のあり

又者へ  
奥

とりの字折る一つあり  
おの心ありれとこれ  
あり上しこの敷を際限ゆへ  
る大細とありけりあり

朽ら葉  
一松のあり  
一柳あり

白也  
新式目の  
あり

あり葉  
とありちと替也  
ありそ冬あり松

のありを雛也柳ちる紅葉ら  
らるるの敷也折と替  
てい同る一以上三也楸柏

ありとあり梅ありありありの  
中し可有為ありありあり

ありのちるにありありあり不可

嫌おさのらうに日新あつらふ  
ととも一四これと不嫌

おさの声 何ともあつて  
物奇准うらうせう二白

嫌十し

秋 一燒原一うまあき懐紙

をうへて有十し是新式の  
物也さあおさありとくへて

ハ向まあありとも可十し  
あさ三とうりあうとら

杖の外他あさう一ひふ二と  
呼えへ来也

秋 うらうせうらまうせて付へ  
有半いうくと古人制

下 但おさの下ゆえさう  
うらうせうせうへし

くの平くらの多めりす

物あり一をのりて美に通  
用と十し

道 二五白嫌ハ秋ハ大略二  
おさ

白の物あれは嫌い嫌也  
但もさうハ不嫌とら

之 可開 かくて回 極也  
二白可嫌と一補成り極

のり立白嫌へ

おのい草 姑あり

れりい 又二白嫌あり但  
懐白種くゆうおのい

胸のありいさうしつんあさ  
嫌也ありいさうしつんあさ

不嫌しありいの史と史よ  
用とらうりありあさ

うらうせう

おのい草

そいさおろしうらあーとほ  
る

かりわくら人備る

かりひいーよ まにみま  
つささくら

向 他准し  
向と見取とへへ二あり

かりひやほ る 思の字

二白蝶へ よ 梅 ゆりや

りあ約付てもうほー

杉のゆ ら 柳のつらまき

らあま 面 鏡 共一の上

二あり面乃まの鏡のまよま  
二白蝶あり陸のまよま 二白蝶

かりうけ ま ちるまよま

ハミ神のうやまありうけ  
まーととあふよりうけ  
まらと武蔵神のうやま  
あつうかりうけとけう  
あ世これあけし大うあや  
まらありまらうくのま  
乃多形勢要

御座 ま 西ありんま

まあり 帯 衣 帯 あ び

れく あ あり あ あり あ あり

一切履 あ あり あ あり

起 あ あり あ あり



竹と付る事白地あり但  
着るに箱すれども  
へし乃れくわしきれ  
花地ありあれをあり  
心動かしき  
申也  
枝の字ありれども  
紅葉中千指うま地あり  
くハニ百きらよ  
無

くさび  
くさび  
葉の字ありれども  
紅葉中千指うま地あり

くさび  
くさび  
葉の字ありれども  
紅葉中千指うま地あり

くさび  
くさび  
葉の字ありれども  
紅葉中千指うま地あり

くさび  
くさび  
葉の字ありれども  
紅葉中千指うま地あり

くさび  
くさび  
葉の字ありれども  
紅葉中千指うま地あり

くさび  
くさび  
葉の字ありれども  
紅葉中千指うま地あり

くさび  
くさび  
葉の字ありれども  
紅葉中千指うま地あり

くさび  
くさび  
葉の字ありれども  
紅葉中千指うま地あり

くさび  
くさび  
葉の字ありれども  
紅葉中千指うま地あり

くさび  
くさび  
葉の字ありれども  
紅葉中千指うま地あり

くさび  
くさび  
葉の字ありれども  
紅葉中千指うま地あり

くさび  
くさび  
葉の字ありれども  
紅葉中千指うま地あり

くさび  
くさび  
葉の字ありれども  
紅葉中千指うま地あり

くさび  
くさび  
葉の字ありれども  
紅葉中千指うま地あり

くさび  
くさび  
葉の字ありれども  
紅葉中千指うま地あり

上  
上  
上





あひくくん あひくくんの書

始あり夕河の地

確之

録 て とけの八

くす くすの

と向

とれ

とれ

とれ

とれ

とれ

とれ

い



子十

